

患者を 支える人々

①日常生活動作のリハビリ担当 ②希望に合わせて自助具作りも

千葉県鴨川市の亀田総合病院には緩和ケア科がある。がんの進行度にかかわらず、体の痛みや不快な症状、心のつらさをやわらげるための外来で、多職種のコメディカルの人たちによる緩和ケアチームで対応する。07

からはリハビリテーションも重要視され、理学療法士や作業療法士も加わるようになった。理学療法士は主に基本動作（ベッドから起き上がる、立つ、歩くなど）について、作業療法士は日常生活動作（食事・着替え・移動・排泄・姿勢や整髪・入浴など）についてリハビリを担当する。亀田総合病院で

は、それにとらわれずに、病気の進行度に応じて担当を決めている。

作業療法士の田辺瑠子さん（26）は、病状が末期でベッドで生活する患者がどうすれば痛みなく寝返りや起き上がり、着替えることができるか、車いすやポータブルトイレへ、車いすから便器へ移れるかといった課題を患者や家族に指導する。

作ったりすることもある。患者は、自分の体が思うようにならないと、気持ちが悪みがちになる。だが、一人でできることが増えると希望がわき、表情に変化が表れると言う。「患者さんの目に力が入り、「今日はこうしたい」「これから、こんなことができれば」という言葉が出てくるようになります」。緩和ケア科のリハビリを受けたい患者の2割弱が一時帰宅したり、退院したりできた。

作業療法士 田辺 瑠子さん

理学療法士は主に基本動作（ベッドから起き上がる、立つ、歩くなど）について、作業療法士は日常生活動作（食事・着替え・移動・排泄・姿勢や整髪・入浴など）についてリハビリを担当する。亀田総合病院で

スプーンを握る、はしでそばを食べる、髪をどく、ペンを持つ。そんな生活の基本的な動作で不自由なことがあれば、補うための自助具の使い方を教えた。田辺さんが希望に合わせて

83年生まれ。05年、作業療法士の資格を取得し、亀田メディカルセンター・亀田総合病院に勤務。07年から現職。日本作業療法士協会、日本緩和医療学会会員。



千葉県御宿町の60代男性は肺がんが脳に転移して10カ月入院中。末期でほとんど話せない状態だが、週に2、3回リハビリを受けている。家族は「リハビリが終わると気持ちよさそう。私たちにとっても、老々介護の中で医療者と支え合っていることを実感できる時間。日ごろの疲れが癒やされます」と話す。だが、がん医療のリハビリは、また始まったばかり。特に、緩和ケアで実践している病院は、全国で一割程度とみられる。（医療ジャーナリスト・福原麻希）

（アスパラクラブのホームページに福原さんの取材記を掲載しています）